室町時代の文書を読む

１　時代背景を読む

〇室町時代の関東地方

室町時代･･･建武３年（1336）　足利尊氏が京都を中心とした幕府を開く

☆足利氏を頂点とした時代

⇔それまでの“武家の都”には「鎌倉府」が置かれ関東を支配

・足利尊氏

三男義詮･･･２代幕府将軍（京都足利氏）･･･子孫が将軍家。

四男基氏･･･初代鎌倉公方（関東足利氏）･･･子孫が鎌倉（古河）公方。

略系譜　基氏―氏満―満兼―持氏―成氏―政氏―高基―晴氏―義氏

（ここから古河へ移る＝古河公方）

･･･幕府との反目の歴史

氏満（2代）…土岐氏の反乱（康暦の政変）に加担しようとした？

→　重臣上杉憲春の諫死で留まる

満兼（3代）…大内政弘の乱（応永の乱）に加担

→　出兵直前（武蔵府中まで進軍）に政弘が敗死で陳謝。

持氏（4代）…将軍の地位を望んだ唯一の鎌倉公方。

→　永享の乱で幕府に追討され、鎌倉府は一時滅亡する。

成氏（5代）…関東管領上杉憲忠を殺害して幕府と対立（享徳の乱）

→　享徳の乱（1455～1483）以後、関東は戦国時代

２　資料について

（１）清河寺文書

清河寺は現さいたま市西区清河寺に所在する臨済宗円覚寺派の名刹。縁起によれば、延文５年（1360）に鎌倉公方足利基氏が兄竹若（足利尊氏の次男）の菩提を弔うため、鎌倉大慶寺に居住していた傑翁是英を開山として招き建立したとされる。清河寺に伝わった文書は室町・戦国期から近世に至るもので、文書館寄託。文書館で請求すれば「CH 本（複製本）」や高繊細デジタルカラーですべての写真を閲覧可能。

（２）安保文書

武蔵武士、丹党の安保氏のもとに残された文書群。鎌倉時代から、戦国時代までの文書が残されている。中世の関東地方の動向を知る上で重要。大部分は横浜市立大学図書館と、埼玉県立文書館に分かれて収蔵される（他に個人蔵・東大史料編纂所所蔵なども存在）。文書館のものは埼玉県指定文化財。文書館で請求すれば、館所蔵の安保文書は「CH 本（複製本）」や高繊細デジタルカラーですべての写真を閲覧可能。

３　資料を読む

資料１　足利持氏御教書（下知状）「清河寺文書」（清河寺文書 No3）

語句・人名のポイント

・御教書　……「みぎょうしょ（みきょうじょ）」。古文書の形式の一つ。本来は三位以上の貴人の仰せを奉じた文書の総称。武家文書では、将軍や公方の仰せを奉った書札様文書をいう。

・寄　　進　……土地やモノを寄附すること。

・在　　家　……「ざいけ」。主に百姓の住居とその付属耕地をいう。

・長井駿河三郎実基　……大宮地域を領していた武士の一人か。同時期に中茎郷（現さいたま市西区中釘）を領した長井下野守憲盛という人物が存在する（「雲頂庵文書」）。

・紹旭蔵主　……実基の叔父とあるだけで詳細は不明。

・沙　　汰　……沙は砂、汰はえらび分ける意で、水の中で砂をゆすって、砂金などをえらび分けることから、転じて淘汰すること、精粗を区別すること、理非曲直を明らかにすること、裁断すること、物事を処理することなどきわめて多岐の意味に用いられる（『国史大辞典』）

・従三位源朝臣　……足利持氏。「足利」氏の姓は「源」。朝臣は本来の意味は古代の姓の一つだが、この時代は儀礼上のものに過ぎなくなる。

文書形式を読む

資料１に先行する文書…足利持氏寄進状「清河寺文書」（清河寺文書 No2）

　→寄進した内容を、正確に行ってもらうことが重要

※中世社会は「自力救済」。すべて自分で文書を取りに行き、権限を行使する。

「安房四郎」…上杉憲実。当時の関東管領であり武蔵国の守護。

資料１の位置づけ＝持氏から守護に現地での打ち渡しの命令。

　…基本形は守護→守護代→在地領主へ…という命令形態

花押を読む

☆足利氏の花押型

…「足利様」＝初代足利尊氏が「高」（旧名「高氏」）字を基に作成し、以後足利将軍家は代々この型を使用する。

足利尊氏

６代足利義教

８代足利義政

（※画像は『新編埼玉県史　資料編５』より）

※下部分が丸みを帯びる特徴がある。

⇔関東足利氏が代々用いる花押型「関東足利様」

足利基氏　足利氏満　足利満兼　足利成氏　足利義氏

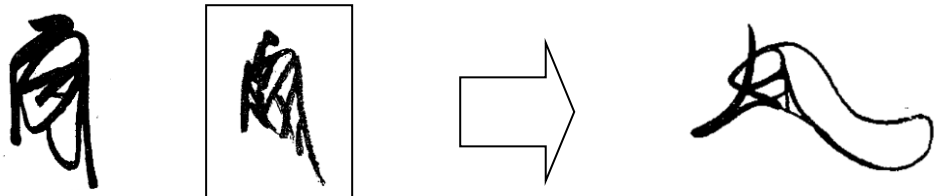
※満兼・義氏は古河歴史館図録『古河公方展』より。他は上と同じ）

※下部分は直線（氏満初期・満兼初期は右下部分のみ丸みがある）

★持氏は鎌倉・古河公方で唯一「関東足利様」の花押を用いなかった人物

初期の花押…犬懸上杉朝宗の花押がモデル。朝宗は満兼・持氏の養君。

後期の花押…将軍家が用いる花押型に近い。改変は応永 33 年（1426)、将軍足利義量が若くして病死し、持氏が将軍職を強く望み始めたと考えられる年代。



足利持氏初期型　上杉朝宗　足利持氏後期型

⇒持氏は永享の乱（後述）で幕府の討伐を受けて敗死。鎌倉府は一時的に滅亡する。

資料２　細川持之奉書「安保文書」(安保文書 No12)

語句・人名のポイント

・雑　説　……「ぞうせつ」。悪い噂話。
・現　形　……「げんぎょう」。形になって現れる。出来事が起こる。
・抽忠節　……「ちゅうせつをぬきんず」。忠誠を尽くす。
・執　達　……「しったつ」。取り計らって伝えること。
・右京大夫　……細川持之。細川家当主で時の幕府管領。
・安保信濃入道　……安保宗繁。

時代背景

☆関東を揺るがす永享の乱～結城合戦

〇永享の乱

永享 10 年（1438）8 月、足利持氏の幕府への反抗が頂点に達し、それを咎めた関東管領上杉憲実と対立。幕府は憲実を支持し、軍勢を派遣。破れた持氏は翌年 2 月、鎌倉永安寺で自害する。

〇結城合戦

永享 12 年（1440）3 月、足利持氏の遺児安王丸・春王丸を擁立した結城氏朝等の勢力が結城城に集結する。幕府は再び軍勢を派遣し、苦戦するも嘉吉元年（1441）4 月に結城城が落城。安王丸・春王丸は捕らえられ、美濃国垂井で斬首される。

⇒資料２は結城合戦直前に出されたもの。関東での不穏な情勢を察した幕府が、幕府とも親しい間柄である安保氏に状況を確認し、何か事が起こったら対応するように命じている。

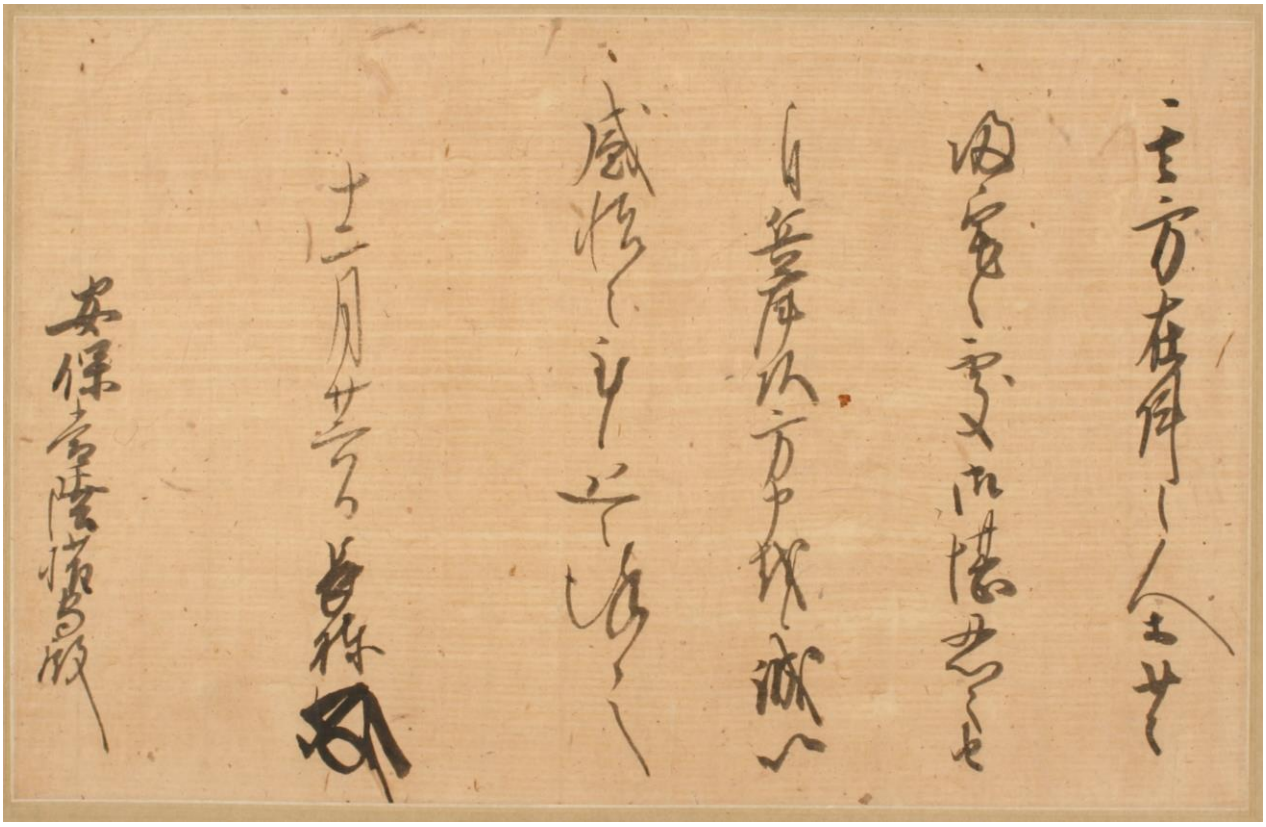
文書形式を読む

・奉書…上位者の命令をうけて、その内容を伝える文書形式。文書中に上位者の文言があり、書留文言が「仍執達如件」となる。

⇒発給者の細川持之は将軍足利義教の「仰下」をうけ、安保宗繁に伝える。

参考資料

○永享 12 年 12 月 26 日　上杉長棟書状「安保文書」（安保文書 No16）



⇒結城城での合戦は長期戦を極めたため、途中で勝手に帰ってしまう人たちも多かった。そのなかで安保憲祐（宗繁の子）は陣中に留まり戦っていた。資料はそのことを憲実（「長棟」は出家後の名前）が賞したもの。

解　読

其方、在陣之人等少々」帰宅之処、御堪忍之由」自兵庫頭（上杉清方）方申越候、誠以」感悦之至候、恐々謹言

十二月廿六日　　長棟（上杉憲実）（花押）

安保常陸権守殿

○参考図書

・杉山一弥編『図説鎌倉府』（戎光祥出版、2019 年）
・黒田基樹編著『足利持氏とその時代』（戎光祥出版、2017 年）
・黒田基樹編著『鎌倉府発給文書の研究』（戎光祥出版、2020 年）